通信第三十三号　　南無阿弥陀仏

　　　　　　　　　人として生まれた意味をたずねていこう

この題は令和五年（二０二三年）に厳修される宗祖親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八百年法要のテーマであります。私自身が全く恥ずかしいのですが、数年前、慶讃法要のことを聞いて直感したのは「また寄付か。一戸当たりいくらになるのだろう」ということでした。教区改変や組の改変で寺や教団の衰退が早まるのではないかと懸念していた中でのことでした。

昨年の暮れ、隣の宇佐組の門徒会長である渡辺和義さんから、慶讃法要のテーマをもとに門徒会で法話をしてほしいという要請を受けました。私は行政のことは苦手であり、大会にはあまり向かないことを知らされつつありますが、渡辺さんは聞法の同行さんでもあり、長仁寺の聞光道に参って来られて懇意にしている関係ですから、引き受けさせていただきました。

そこで庫裏の改築をしてくれているご門徒の大工さんにたのんで横三〇センチ縦二メーター位の板を作ってもらい、テーマを毛筆書きして本堂にかかげました。坊守はパソコンの紙に太字印刷して壁等に貼りました。御門徒さんへのご寄付もお願いすることとなりました。

こうした中で、このテーマを生かさなくてはという気持ちが起こって来ました。そして二月二十二日に宇佐市の勝福寺さんを会場として門徒会の聞法会が開催されました。三十五名位の参加者でしょうか。五人の方から質問があり三十分の超過時間となりました。今、余韻と新たなお育てを念じつつ書かせて頂いています。

親鸞様のご誕生が慶ばれるということは、自分自身が人間として生まれたことを慶べるのかということであります。参加者に「人として生まれて来たことを慶べますか。慶べる方は手をあげて下さい」と申し上げたところ、手を上げた人は半分以下でした。三帰依文の始めに

人身受けがたし、今すでに受く

仏法聞きがたし、今すでに聞く

　「仏法聞きがたし、今すでに聞く」があれば必ず人間に生まれたことが慶ばれます。人間に生まれたことの真実の目的が遂げられるからです。実は私自身が内向的自虐的性質であったせいか、人間に生まれてよかったと思えず、自分を嫌い、人を嫌い、暗く淋しい幼少期、青年期があったのです。父と母が不仲で喧嘩ばかりの日々、母が家を出てゆくこともありました。今、それでよかったと思われます。ああいうことがあったればこそお内仏によく坐り、やるせない心から魂の親を求める事となり、仏縁が深まり、先生方を訪ね、弥陀の本願をたのむことと成ったからです。今は心から人間として生まれてよかったと思えます。

立教開宗

　浄土真宗の立教開宗ということはどこに根拠があるのでしょうか。私は親鸞様が『教行信証』をお書きくだされたことだと思います。その根幹は、他力であります。廻向に他力と自力の廻向があります。真宗新辞典には、他力（浄土門）の廻向を、「如来がその徳を衆生にめぐらし施して救いのはたらきをさしむけること、自力の心をひるがえして願力に向かわしめること」とあります。いっぽう自力廻向（聖道門）では、「自分の修した善因を、仏果菩提を得ることにさしむけ、自己の善根功徳を他の衆生を利益するためにさしむける。　中略、　親鸞は曇鸞の『浄土論註』にもとづいて、衆生が浄土に往生してさとりをひらくも、滅度を証してから穢土にって利他教化のはたらきをあらわすも、すべては弥陀の本願力のしからしむるところであり、仏から衆生にさしむけられたものである」とあります。だから親鸞様は「廻向したまえり」とお教え下さったのです．

聞法のご縁がないと、穢土も浄土も有るやら無いやらわかりません。欲にまみれて濁りも清浄も区別がつかないまま不平と不満と不安がうずまいています。穢土に真実はありません。「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごとある事なきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」（『歎異抄』後序）。

私は世間にまことを求めている間は暗く固く狭い人生でした。真実を人にも自分にも要求しては腹立たしく空しい日々でした。自分と自分が対立し、人とも対立しますから人と会うのが嫌でした。人に負けるのが嫌でした。幸福を求めてはいろいろなことに挑戦しました。伝導部に入ったり、サッカーをしたり、音楽をしたり、女性を求めたり、八ミリ映画を撮ったり、同人誌を出したり、禅寺へ下宿したり。しかし、どれも長続きせず挫折の連続でした。生き甲斐はどこにあるのか。真実はどこにあるのか。ただただ苦しみが深まるばかりでした。そういう日々の中で今の妻と出会い、竹中智秀先生と出会い、清沢満之先生の精神主義（浄土の世界）、信国淳先生の『歎異抄』・親鸞様のご和讃の世界に触れさせて頂いたのです。求めていた世界があったという喜びがありました。肉体が死んでからの浄土ではなく、肉体があるうちに浄土を頂けることを知らされました。南無阿弥陀仏のお心を聞く聴聞のご縁がはじまりました。しかし、それからが長くかかりました。信国淳先生が亡くなり、藤谷秀道先生との出会いがあり、藤谷先生が亡くなられ、大石法夫先生との出会いそしてお育てがある中で求道の苦しみはつづきました。それなりの喜びもありましたが、事件が次々に起こっては落とされるということが三十年続きました。その果てに母とのご因縁により「弥陀をたのむ」ということが、私において発起されたのです。

　　なにのようもなく、ひとすじにこの阿弥陀のにひしとすがりまいらするおもいをなして、後生をたすけたまえと**たのみもうせば**、この阿弥陀如来はふかくよろこびましまして、そのより八万四千のおおきなる光明をはなちて、その光明のなかにそのひとをおさめいれておきたまうべし。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　お文様五帖目第十二通

　同じお心を『歎異抄』の第一章では

　　弥陀の誓願不思議にたすけられ参らせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもいたつ心の起こるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり

　と、お教え下さっています。念仏申そうとおもい起つこころ、すなち阿弥陀仏をたのむこころが発起するときが「信の一念のとき」であります。

私は阿弥陀仏を頂いて居ない、信心をいただいていない。すなはち、阿弥陀仏をたのんでいないと全否定されたとき「まねでもいいから念仏しようや」と言わされた時が阿弥陀仏からのご廻向が届いた時であったのです。

　先生のご文章に全く共感をいただくところがありました。

　　「たのむ心」とは真実信心のことであります。弥陀をたのむ心、それは弥陀の方から、あたえられたものであって、あたえられた信には、かならず名号がそなわっておって、名号をあたえたい本願なのですから、必然的に、信は名号となって外にあらわれたもうのであります。たのむ心がこれば、めとられて、尊き喜びに入り、ありがたやと喜ぶ心となり、南無阿弥陀仏と、称えようと思う心が起こってくるのであります。

　八十五年前に刊行された「蓮如上人御一代記聞書講話」であります。

　　「弥陀たのむ一念」から、肉体が死んでからではなく、煩悩にまみれた身心のままに、「一体」「南無（機）・阿弥陀仏（法）一体」「不断煩悩得涅槃」の大利益をいただけます。

　「弥陀たのむ一念帰命」（信の一念）が発芽、発火のときであります。ご廻向の南無阿弥陀仏の出発であります。

　「真実信心には必ず名号を具す。名号には必ずしも願力の信心を具せず」（聖典２３６頁）と親鸞様のおおせの通りであります。

　　真実信心の称名は

　　　弥陀廻向の法なれば

　　　不廻向（人間から差し向けるのは不可能である）となづけてぞ

　　　自力の称念きらわるる

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　正像末和讃

如来の作願をたずぬれば

　　　苦悩の有情を捨てずして

　　　廻向を首としたまいて

　　　大悲心をば成就せり

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　正像末和讃

念仏は人間からではなくて、如来の大悲心から凡夫の心身に廻向されて来ているのです。如来大悲の恩徳です。また、このことを教えて下さった親鸞様、善知識さまがたのお陰であります。

　　浄土の大菩提心は

　　　願作仏心をすすめしむ

　　　すなわち願作仏心を

度衆生心となずけたり

　　私の方からは浄土を求める心はなかったのです。ただ天上界の我の思いを満たすことばかりにあくせくしては、地獄、餓鬼、畜生道の三悪道をって来たのです。仏法の専門用語を知っても同じ事であったのです。

「南無とは帰命」、これは浄土からのご廻向（おさしむけ、おはたらき）であります。私共からは浄土に帰依するとも、阿弥陀仏に南無（帰命）するとも、弥陀をたのむとも言います。後生たすけたまえともいいます。しかし、その主体は如来様の方にあるのです。他力です。人間は法に逆らい濁り迷うのが本能であります。故にみな罪悪深重の悪人であります。仏の本願力は清浄であり救うのが本能であります。「」であります。炭と火の関係をたとえとしたり、釘と磁石にたとえておられます。

　『正信偈』も「帰命」から始まっています。「本願のいのち、無量寿如来に帰命します。不可思議光に南無（帰命）します。如来の大慈悲と智慧光に帰命いたします。」から始まっています。それは如来大悲のご廻向のお蔭であります。南無阿弥陀仏はご恩報謝のお礼であります。それも浄土からのご廻向であります。人間からは真実のお礼や満足はありません。自分にとって都合が良いか悪いかしかありません。浄土がなければ穢土もありません。ただ我欲にまみれて、損した、得した。勝った、負けた。良かった、悪かったと人間の計らいと目に見える物質的価値の世界を堂々巡りするしかありません。それしかないと思っているのかなと感ずる知識教養人も多々見かけられます。

仏縁があることは本当に有難いことであります。私において浄土（深い魂、心の世界）が豊かになると同時に穢土が豊かになります。穢土（人間の我欲による物質的世界）が豊かになったら浄土が豊かになるのでは決してありません。多くの人が見せてくれています。

生きる意味、すなわち生きがいとは

　目的をもって必死に生きているうちは、生きる事、死ぬことの疑問はあまり起こって来ません。起こっても先送りです。ところが目的を達成したり、歳をとったり、病気をしたり、深く行き詰まったりすると生きる事が問われて来ます。「生き甲斐とは何なのだろう。あれだけやって来たのに何かむなしい」この空しさをごまかせなかったのが、親鸞様であり、七高僧様方、そして釈尊であったのです。比べる、限りのある世界。相対・差別・有限の世界の壁は決して人間からは超えられません。絶対・平等・無限界は人間を超えた世界、人間の計らいや感情やきれいな言葉では超えられないのです。意識の届かない深い迷いの世界を照らし、闇を破り、光明土へ摂取する力が弥陀の本願力です。人間は人間の解らない深い所で迷い、解らない深いところで救われていけるのです。解るから救われるのではありません。身の事実、生活の事実、生きざまの事実を通して信じさせて頂くのです。見させて頂くのであります。

『教行信証』の証の巻に「の」を超えるには、諸仏方のはげましと阿弥陀仏の生きたはたらきを見たてまつるものはこの難所が超えられていくとあります。本願他力のご廻向に遇う人はと言ってもいいでしょう。が力をたのみ、どこまでも自分の能力で登ろうとしてはずりおちる迷いを繰りかえして来た私を、海の方へと方向転換させて下さるお育てをして下さったのが善知識様でありました。また、悲劇の事件の数々でありました。今、私は帰る世界、よりどころの世界が転換されて、空しさがなくなりました。無意識の自力のみが取られた感じが致します。

　　如来の廻向に帰入して

　　　願作仏心をうるひとは

　　　自力の廻向をすてはてて

　　　利益有情はきわもなし

　今の私の生きがいは法をお伝えすることであります。本願の道の歩みであります。

　うれしいお便りを紹介させて頂きます。

「宗教色なし　新たな別れの形　名古屋の会社紹介サイト

　　お坊さんもいないお葬式。お経も位牌もないお葬式の提案」

　こんな見出しで新聞記事になったものを読み、がっかりしている折りに、江本先生の通信が届きました。ありがとうございました。何回も読ませて頂きました。ほっこりとしたものを感じ嬉しくも成りました。

　　ご住職としての最後の報恩講をお勤めになられたご様子に感動いたしました。六名もの仏弟子が誕生されたとのこと本当におめでとうございます。

　　やはり日頃の先生のあり方が御門徒様に感化されているのだと思いました。日常に起こって来る様々の出来事を本願に立ち帰り真摯に受け取って行かれるご様子が、佐藤様のお手紙からも伺われました。

　　とても大切なことですね。私にはまだまだ先生のようには受け取ることはできませんが教えがある事は本当に有難くうれしい事です。子や孫に相続してゆく責任を強く感じるこの頃でございます。誠にありがとうございました。南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　三重県桑名市　　村田たまゑ

　「仏さまのお喜びは自我の自己満足の喜びではない」という金言を有り難く拝読させていただきました。

　　　南無阿弥陀仏をとなうれば

　　　　十方無量の諸仏は

　　　　百重千重して

　　　　よろこびまもりたもうなり

という和讃が頭をよぎりました。自我を満足させるために走り回っても、真の満足は無く虚しさし

か残らないことを端的にしめされたものと味わっています。　合掌

　ご住職のお勤めをご卒業されて、今後ますます布教活動に専念なさることと思います。今後とも

よろしくご指導のほどお願い申し上げます。

　令和二年二月十九日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　富山県高岡市　高井　外次　拝

前略　法喜さまと共々に歩まれる「本願道の道」深い所で響き合いながらの道、長仁寺はますます信心の燃えているお寺さんになって来ましたね。大石先生をご縁として、長仁寺様の通信をいただけますことありがたく、再認識させていただいています。仏法の深い所を私のような知識のうとい者でも、心に響く様に、聞こえるように、伝えて下さるご苦労凄いなあと深く深く読ませていただかねばと感じさせられます。その中に「ご名号を父にたとえられ、光明を母にたとえられ」というこの文章、いのちの誕生。涙で読ませていただきました。こういう表現は始めてで、心に届きました「南無阿弥陀仏」です。

　　佐藤淳さまのお便りも、深く有難い教えをいただきました。皆さんに会いたいです。聞法にも参りたいです。内臓はまだ元気なのですが、足、腰がたよりになりません。どうにもならないところに通信が届いて下さり、阿弥陀様にお遇い出来ます。

　昨日は嫁さんに送迎してもらって、お寺にお参りさせていただきました。うれしい一日でした。どうぞ、どうぞお身体をお大事になさってお導き下さいますようお願い申し上げます。

　わたしも、時のながれとともに、お念仏の世界がありがたく感謝です。どうかお元気で　合掌

　令和二年二月十七日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　広島県安芸高田原　　水野　ウタ子

一人ひとりの歩みであります。「弥陀たのむ一念」の後は日々起こって来る新しい妄念妄想、煩悩をご縁として南無阿弥陀仏に帰らせて下さいます。その度に他力の信心が深まり成長されます。信心のすすむことが仏様のお慶びであります。マンネリ、惰性、むなしさはありません。一日一日が浄土から、如来さまからのご廻向、ご因縁として新しいのです。

前記の門徒会では、ブラジルで教えて頂いた炭坑節のメロデイで歌う替え歌を歌わせていただきました。題は私が付けました。

　　一念帰命からの新生活

　船が出ますよ　　ア、ヨイヨイ

　信の一念　つめこんで

　南無阿弥陀仏のを上げて

　迷いの港を　今出えます　サノ　ヨイヨイ

一念の信を得る人は　ア、ヨイヨイ

娑婆に居ながら

仏や菩薩にまもられて

浄土へ帰る道すがら　サノ　ヨイヨイ

令和二年三月二日

常照